
うさぎドロップ そのあと二人は

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つむぎドロップ そのあと二人は

【NZコード】

N6085W

【作者名】

キリ

【あらすじ】

「つむぎは淋しいと死んでしまう。
じいさんとお別れした時のりんの泣き顔を見て、なぜだかそんな言葉を思い出していた。」

原作最終巻後の二次創作です。

アニメのみ、原作を最後まで読んでない人は読まないほうがいいです。

ネタバレあるんで。

episode . 1

女の子は何で出来てるの？

お砂糖、スパイス

素敵な何か

そんなもので出来るわ

episode . 1

「りん、おめでとー！」

そう言つて元気よく扉を開けて入ってきたのは、りんことつて遠い親戚であり、幼い頃からの親友である麗奈であった。

「麗奈、ありがとー。あー、その『サージュかわいいね』いつものようにアップにした麗奈の髪には、青いバラの『サージュ』がつけられており、それに合わせたのだろう、薄い青色のドレスもとてもよく似合っていた。どちらも今日という特別な日のために、麗奈が母親と一緒に選んで用意したものである。

「どうでしょー？ママとおそろいなんだよねー。でも、りんの方がチョーキレーだよ」

「うーん、でもこれ、動きづらいんだよね……」

純白の特別なドレスに身を包んだりんは、そう言つて照れたように笑つた。

「おめでとー、鹿賀さん」

「おめでとー」

「竹内くんも内村くんもありがとー」

麗奈のあとに続いて控え室へと入ってきたのは、麗奈の彼氏であ

る竹内くんとその友達である内村くんである。一人ともスーツは着慣れていないのか、どことなくぎこちない様子であった。

「ほー、コウキくんも」

「コウキの名前が出てきて、りんの視線が扉の奥へと向かう。

「……」

そこには、バツが悪そにそっぽを向いて控え室へと入るコウキの姿があった。

「……その、おめでと」

「うん、ありがと」

小学校に入る前から一緒にいた幼なじみで、きょうだいのよう培育ち、一度は好きになつたことのある男の子。今は地元を離れ、遠くの大学に通つているものの、きっと来てくれるだろつと思つていた。

「あっ、コウキ、襟」

ふわりと純白のドレスが揺れる。りんはコウキの前へと歩み寄ると、裏返つたスーツの襟元を直そつと腕を伸ばした。

「あっ

そっぽを向いていたコウキが、思わずりんの姿を視界に捕らえてしまう。

「……？」

伸ばした腕に落ちてきた水滴に、りんが怪訝な表情でコウキの顔を見上げると、そこにはハラハラと涙を流すコウキの姿があった。

「ちょっ、コウキ！？」

「ふ……ぐつ……」

必死で涙を堪えようとしているのは、はたから見てもわかるのだが、どうにも上手くいかないようでコウキは顔を真赤にしている。

「あー、コウキ泣いてるー！」

涙で顔をグシャグシャにしたコウキを指しながら、麗奈がケラケラと笑つた。

「ちょっ、麗奈ちゃん！」

「ウキが泣くところを初めて田にした竹内くんと内村くんが、どうしたものかとあたふたする。

「ウキは手の甲で必死に涙を拭うと、
「りん……あれ……キレイ……つだ」

「うん」

「おめ……おめでと」

「うん」

「……幸せに、なれよ」

「うん」

そう、今日は特別な日。

女の子なら誰もが幸せになれる日。

この日は、鹿賀りんと、彼女を育てた河地大吉の結婚式であった。

どうしてこんなことになってしまったのか。

ダイキチは実家へと向かう電車の中で、そんなことを考える。隣りには自分にとって娘のような存在である「りん」が、窓の外の流れしていく景色に目を奪っていた。

当時、祖父の隠し子として現れた六歳の彼女を引き取り、育てる決めたのが三十歳のとき。

それから悪戦苦闘しつつも、周囲の人々に助けられ、なんとか今年彼女が大学に入るまで育ててくことができた。

そんな彼女とダイキチはこれから（結婚するって報告をしにいかにやならんのか……）思わずため息が漏れる。

決して、りんのことが嫌いなわけではない。彼女に気持ちを打ち明けられてから一年間、彼女をそういう風に見ることができることについても真剣に考えてきた。

結論として、ダイキチはりんとの結婚を選ぶ。

りんが本当は祖父の子供ではないという事実を彼女自身が知ったとき、正直ダイキチはりんとの今後の生活に翳りを感じていた。血のつながりだけが家族だとは思わないが、それではりんと自分との関係はどう言つと、答えることができないでいたのだ。

自分とりんがそういう関係になることで、本当の意味で家族になることができ、りんもまたそれを望んでいるのであれば、ダイキチがそれを拒む理由はない。

とはいえ。

（母ちゃんに何て言えばいいんだ……）

世間的にみても、結構アレな問題であることはわかっている。そういうそつ受け入れられるものでもないだろう。わしゃわしゃと頭をかくダイキチに、

「ダイキチ、髪の毛抜けちゃうよ?」

心配そうにりんが言つた。

かきむしめる手を止め、ダイキチはふと想つ。

（……あのとき、りんを養子にしていれば、また違つたのかもれないな）

りんが小学校に上がる前、苗字が違うことで何か言われたりしないようにと、りんを養子にしようとしたことがあった。そのときりんは、「ダイキチはダイキチでいい」と言つてくれたのだ。子供にとって何気ない一言だったのだろうが、それは祖父の代りとしてではなく、ダイキチをダイキチとしてそのまま受け止めてくれる言葉だった。

（思えばあのときから、ずいぶん遠くまできつたなあ……）

電車のシートに身を預け、振動を感じながら窓の外へと視線を向ける。

時間は止まってはくれない。一人の距離や関係が変わったとして
も、変わらず進み続けるのだ。

ふと、ダイキチの手に隣りに座るりんの手が触れた。

「　ダイキチ、やっぱりわたしじゃダメ？」

「…………」

不安そうに震えるりんの手を、ダイキチはギュッと握り返す。

「そんなわけねーだろ。俺が、りんということを選んだんだ」

今考えれば、りんを引き取る前はどんな生活をしていたんだろう。
もう思い出すことができないほど、それが当たり前になつていて。
いつかはりんを母親に返すことも覚悟していた。だからこそ、ダ
イキチはりんとの間に一線を引いていたのだが　。

親代わりであつて親ではない。そんなあいまいな関係だったから
こそ、ダイキチ自身最終的にこうなることを受け入れられたのかも
しれない。

ダイキチが笑うと、りんも笑う。

「そつか、うん。　はやく着くといいね、ダイキチの実家」

「あああああ…………」

このまま時間が止まってしまえばいいのに。再び頭を抱えながら、
ダイキチはそんなことを思うのだった。

episode・1 (後書き)

りんごやんペロペロ (^ ^) 。

えー、とこりわけで、いつがダーロップの一次創作です。

原作を表紙買いしたとき、まさかアーメ化するとは思わなかつたけどなあ。

じんべいとか世界で一番NGな恋とか娘3動物園とか好きです。

episode . 2

episode . 2

「あらまー、いらっしゃい」

そう言って玄関にてダイキチたちを出迎えたのは、ダイキチの母である幸子であった。

「大学、無事受かったんですって？」

「うん、保育科のある短大で」

廊下を歩きながら、そんな話をする。事前にダイキチから電話で大学合格の報告は済ませていたものの、実際にこうして本人の口から聞くのはやはり嬉しいものなのだろう。

そうして居間へと着くと、そこにはダイキチの父である健一が新聞に目を通していた。

「おや、おかえり」

「ただいまー」

軽く挨拶を交わし、りんと二人居間のテーブルの前に腰をおろす。しばらくして、幸子が人数分のお茶を煎れてそこに加わった。

「入学のお祝いをしないとねー」

「あー、それもなんだけど……。今日はもうひとつ報告があつて」「何よー？ りんちゃんの大学祝いよりもっと重要なことでもあるの？」

「いやー、まあ、重要っちゃん、重要かな」

ダイキチはどう言ったものかと悩んでいたが、やがて決心したようになにそれを口にする。

「その、結婚することになつたから」

「誰が？」

「俺が」

「…………」

静かな居間に、テレビの音がやたらと大きく響き渡る。

しばしの間固まっていた健一と幸子だが、すぐに気を取り直すと、驚きつつもしかし嬉しそうに笑みを浮かべて言った。

「いや、おめでとう。それにしても、驚いたなー」

「そうよ。ビックリしたわよ。アンタ、結婚しないものだとばかり

」

「ん、ああ」

嬉しそうな二人を前に、ダイキチは内心複雑な思いを隠せないでいた。

「それで、おまえ相手は？　りんちゃんも知っている女性のかい？」

「いや、知ってるつちゅーか……なあ？」

乾いた笑みを浮かべ、ダイキチはりんの顔を見る。

「うん、その……わたし、だつたり……」

そう言ってソロリと腕をあげるりんに、二人の視線が向かう。

「またー、冗談言つちやつて」

そう言つて笑う幸子に、ダイキチは真剣な面持ちで、

「いや、本気でりんと結婚しようと思つてる」

「…………」

バチーンという強烈な音が、居間に炸裂する。

「か、母ちゃん！？　いきなり何すんだよー！」

「この、この……！」

幸子の手には、お茶を運んできたお盆が握られており、それを何度も何度もダイキチの頭へと振り下ろす。

「いた、痛いって！　ちよつ、母ちゃん、落ち着いて、落ち着けて！」

「アンタ、いくら彼女ができるからって、りんちゃんに手を出す

なんて！？」

「出してねーよー……まだ」

「黙りなさい、この……。」

「まあまあ、お母さん、一人の話を聞いてみないと……」

なおも叩き続けようとする幸子を健一が止め、ダイキチとの間にりんが割って入る。

「じめんなさい。違うの、わたしからダイキチに告白したの。ダイキチはそれに真剣に悩んで、思えてくれて」

「……」

幸子は振り上げたお盆を、力なくおろすのだった。

「結局、俺にりんを拒むことなんてできねーんだよ。だからまあ、その、ケジメをつけなきゃなーって」

「プロポーズはダイキチからだよー」

「おまえは黙つてなさいっ！」

ダイキチとりんのやりとりに、幸子は深くため息を吐く。それから、ダイキチの顔を真っ直ぐ見据え、

「アンタはいつもそうね。大事なことを勝手に決めちゃって。どうせまた、今回も腹くくつちゃつてるんでしょ？」

世間になんて思われようと、ダイキチはりんを一生守ることを決心した。

ダイキチがりんのことを何より一番に考えてそう決めたのであれば、これ以上何も言つたとしても意味はない。

「全く、少しくらいは相談しなさい」

あきれたように鼻を鳴らし、それから彼女は当然のようこそそれを口ににする。

「それで、結婚式はいつやるの？」

幸子の言葉に、ダイキチとりんが顔を見合わせる

「……いや、それなんだけど。式はあげないでおこうかと」

それは、事前にりんと一人で話しあって決めたことだった。世間的に見ても、二人の関係が好ましいものでないことはわかっている。そうであるならば、わざわざ波風を立てる必要もないだろうとの考えであつた。

「なに言つてんの、アンタ！　アンタはよくつても、りんちゃんは……」

「いいの、おばちゃん。わたしはダイキチと結婚できるだけで幸せだから」

「……りんちゃん」

「そういうことだから。あんまり大っぴらにすることでもないと思つ……」

ダイキチがそう言つと、りんもその横で頷く。しかし幸子は、

「ダメよ、一人とも」

きつぱりとそう言い切るのだった。

「結婚式はちゃんとあげなさい」

「いや、だから」

「アンタ、りんちゃんを幸せにしたいんでしょ！　だったら、ちやんと式はあげなさい」

ピシヤリと言つて放つ幸子を前に、ダイキチは何も言ひ返すことができなかつた。

そこに、父親である健一がゆつくつと口を開く。

「お母さんの言つ通りだ。おまえ、覚悟は決めたんだろ？　だつたら、きちんとしなさい。ああ、それと、式の費用なら心配いらないよ。りんちゃん、大学へは奨学金で行くんだろ？　せめて結婚式くらいは、僕たちに出させてくれないかな」

episode · 2 (後書き)

中途半端ですがここまで。

ダイキチみたいな親父が欲しかったなあ。
ウチの親父、生きてんのかなあ。

男の子は何で出来てるの?
カエル、カタツムリ
小犬の尻尾
そんなこんなで出来てるわ

episode . 3

「すんません、田高さん。仲人役頼んじゃつて」

白いタキシードに袖を通し、ダイキチは元直属の上司である田高に頭を下げた。

「いや、それはいいんだけどね。にしても、お前とあのリンちゃんがなー」

「普通に犯罪ですよねー」

田高のとなりで、同じ会社の女性である後藤が声を尖らせて言った。

「あー、あんまりいじめないでくださいよ。自覚あるんですから」

ダイキチの言葉に、後藤が小柄な身体を丸めてケラケラと笑う。

「冗談よ、冗談。別に血がつながってるわけでもないし、無理矢理手籠めにしたってわけでもないんだから」

「手籠めって……」

「でも、実際どうなのよ? 他の男にりんちゃんを渡すくらになら自分が一つとか、ちょっととは思つたりしたわけ?」

ダイキチは少しだけ考え、

「いや、俺としてはりんが連れてきた男だつたら間違いはないと思

つっていましたからね。そういう気持ちはあるまり

本当は、りんには普通に大学へ行つてもらつて、普通に恋をして、普通に嫁に行つて欲しかつた。いつまでも側にいて欲しいという気持ちがなかつたとは言わなゐが、そんなのは自分のわがままでしかない。本当に、そう思つていた。

「でもまあ、りんの気持ちを聞いたとき、嬉しくなかつたかつていうと」

「何も知らない子供が、親に對して「好き」だの「結婚する」だの言つのとはわけが違う。親心として複雑な気持ちであつたことは確かだ。それでも、心のどこかで少しだけ安堵している自分がいることに気づいてしまつた。

「これまでりんの感情を優先し、自分の感情は後回しにしてきたダイキチにとつて、そのことに向きあうのは大変なことで

「あつ、河地さんいたー」

「うーす」

「おめでとー」ぞこまーす」

見れば控え室の入り口に、大中小三つの人影が並んでいる。それぞれ、ダイキチの所属する出荷部隊のメンバーであつた。

「おう、ありがとなー」

「そう言つて、ダイキチは三人の方へと向かつ。

「まあ、河地くんらしいですよね。いつでもりんちゃんの気持ちを優先というか」

「うん。でも、今回のこととはさすがに悩んだだらうなー」

「りんちゃんの気持ちを知つたの、一年前らしいですかねー」

日高は苦笑して、メガネのブリッジを押し上げる。

「ホント、アイツのそういう所は尊敬するよ」

「お久しぶり……ですね」

「ウキの母親である「ゆかりは、柔和な笑みを浮かべてそう言った。

「すみません、急にお呼び立てしてしまって」

「いえ、気にならないでください。最近は仕事も減らしていく、暇を持て余していたんですよ」

場所はお互いの家から近い喫茶店。最近は、特にゆかりが再婚してからは連絡を取り合つことも少なくなり、こうして二人で顔を合わせるのは本当に久しぶりのことであった。

「実はその一、『報告と申つか。……俺も、近々結婚することになりました』

言つてから、ダイキチはもうちょっと他に言つがなかつたものかと頭を抱える。

「お相手は　りんちゃん、ですか？」

ダイキチが驚いて顔を上げると、ゆかりは苦笑して、

「すみません。実は、『ウキからお話は……』

「ああ、そうですか……」

お互い気まずげに沈黙する。

先に言葉を発したのは、ダイキチだった。

「やつぱり、変　ですよね」

「え？」

「いや、『レシ』いたおっさんが、ちつとも頃から育ってきた娘と……なんて」

「そんなこと……」

「いいんです。世間的に見て、おかしなことだつていつのはわかってるつもりですから。軽蔑されても仕方ないなつて……」

「軽蔑だなんてそんな！……そんなこと、しないですよ」
ゆかりはダイキチを真つ直ぐ見つめると、

「りんちゃんの気持ち、少しほわかるつもりです。私もダイキチさ

のこと、好きでしたから」

初めて口にしたその言葉は、やはりもう過去のもので。

「りんちゃんは大人で、頭のいい子です。きっと大吉さんのように悩んで、苦しんで、それでも一緒にいたいと、大吉さんを好きでい続けると、決心したんだと思います」

ほんの少し、自分にも勇氣があれば。どんなことがあっても、目の前の彼と一緒にいたいと、そう思えていたなら。

「少し、羨ましいです」

「…………」

喫茶店のBGMが、次の曲へと変わる。

ダイキチは「コーヒーを一口すると、真剣な面持ちでゆかりに伝えた。

「りんのこと、必ず幸せにしますから」

「はい。ぜひそうしてあげてください」

あと一回、二回、三回ぐらいで終わりかな。
ちなみに、これを書いてる時のBGMは「RO-KYU-BU-」のキャラソンで「ともだちピンク」だったり。
おー、おー、おー、おー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6085w/>

うさぎドロップ そのあと二人は

2011年10月8日15時58分発行